「お坊さんからの手紙」二十二通目（平成二十六年十二月）

師走になりました。一年が本当にあっという間に感じます。バタバタと慌ただしくなる月ですが、一年を締めくくる月として一日一日を大事にしていきます。

おきもち

先月、私には素晴らしい学びの機会がありました。先生は、小学二年生の女の子です。

私は、どこにお話に行くにも、自分で描いたお坊さんの絵はがきを持って行き、お越し下さった方々に自由に持ち帰っていただいています。その時、「おきもち缶」と名付けた缶を絵はがきの側に置き、お代を気にかけてくださる方には、「この缶に『おきもち』をお入れいただけましたら幸いです。」とお伝えしています。

その日も同じように並べていると、小さな可愛い女の子が絵はがきを眺めながら私に尋ねてきました。学びの時間は、ここから始まります。

少女「これ、いくらですか？」

私「値段はないから、気に入ったものがあったら、自由に持って行って大丈夫だよ。」

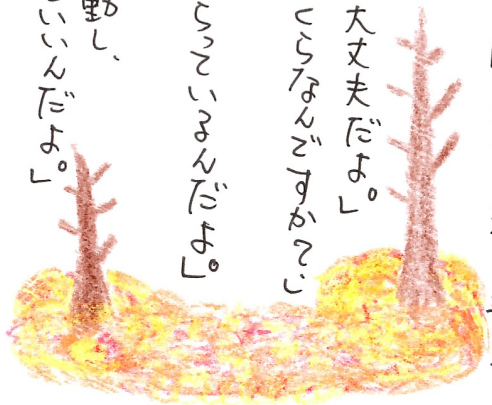
少女「でも、売り物には全部値段がついているはずだよ。これは、いくらなんですか？」

私「これは売り物じゃないんだ。だから値段はついていないんだよ。もし、お金をいただくとしたら『おきもち』をこの缶に入れてもらっているんだよ。」

少女「『おきもち』ってなーに？」

私「『おきもち』は、今の自分にできる精一杯のことを考えて行動し、周りの人に喜んでもらうことだよ。だから、お金じゃなくてもいいんだよ。」

少女「ふーん。わかったー。ちょっと待ってて。」



そう言って、女の子はその場から駆け出していきました。「なんだ？なんだ？」と不思議に思っていると、財布を握りしめた姿で戻って来て、今度は中の硬貨をテーブルに広げ始めたのです。「これとこれは、おやつ代。」と言いながら財布に納めていきます。そうして残ったお金を「おきもち缶」の中に全て入れると、一枚の絵はがきを手に取り、ニコッと笑ったのでした。

「一枚だけでいいので、他にも好きなのがあったら持って行っていいよ。」そう伝えると、また嬉しそうに四枚の絵はがきを選び、再び財布の中を見つめ考え始めました。そして、思い切ったように顔をあげて、おやつ代として残しておいたであろうお金から五十円玉を一枚つかみ、「おきもち缶」へ入れたのです。私は、思わず「スゴイネ!!」と感嘆の声をあげてしまいました。なぜなら、彼女の行いそのものが、まさしく『お布施』の心であったからです。

子どもから学ぶ

子どもには、本当に素直な心が宿っています。普段、『お布施』のお話をすると、皆さん声を揃えて「『おきもち』という表現が、とても分かりやすい」と仰ります。しかし、この女の子には、たった数分話しただけで『おきもち』がどういうものかを感じ取り、自分で考え、実行しました。大人が難しいと言って頭を悩ませていることを子どもは難なく行うことができるのです。それはきっと、子どもが損得勘定という物差しを用いるのではなく、純粋な気持ちで行動するからだと思います。子どもから学ぶことは多くあります。街で出逢った小さな先生に未来への新たな希望をいただいたのでした。

晃司